

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

SER no.156; Concluding Remarks

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00010010

おわりに

本論文集は、環北太平洋地域の先住民文化に関する考古学分野、言語学分野および文化人類学分野の研究動向論文を所収している。最後に、各分野における主要な研究動向を要約し、今後の課題を提起する。

考古学分野における近年の研究の進展は特に目覚ましい。考古学の発掘の成果と発展著しい遺存体に関するゲノム分析の成果を総合することによって、シベリア地域やアラスカ地域、北アメリカ北西海岸地域の「考古学的文化」の成立、変遷、伝播・拡散のプロセスの全体像が解明されつつある。さらに旧大陸から新大陸へ人間集団の移動や新大陸における人間集団の移動が明らかになりつつある。旧大陸から新大陸へ人間集団の移動は一度ではなく複数回にわたって起こったこと、その時期は1万3500年よりもさらに古いこと、アラスカを出発点とする新大陸内での人間集団の拡散ルートには北西海岸沿岸地域を南下するルートとアラスカとカナダの間に出現した無氷回廊を南下するルートの2つがあったことなどが指摘され、研究蓄積が増大するにともない、それらの諸課題に関する知見が年々精緻化されつつある。

言語学分野では、この30年余りの間に新旧両大陸の諸言語に関する語彙や文法、音韻などに関する基礎的研究が多数、実施され、膨大な基礎データが蓄積されてきた。その一方で、それら諸言語間の歴史的関係については、シベリア諸言語に関するフォーテスキューの‘Uralo-Siberian’仮説、ケット語・ナ・デネ語族同系仮説、ハイダ語・ナ・デネ語族同系仮説など複数の仮説が提起され、検証が試みられてきたが、決定的な結論にはいたっていない。また、環北太平洋沿岸地域の多くの先住民社会はそれぞれの言語や口頭伝承の保存活動を通して言語の継承や活性化に力を入れている。

文化人類学分野においてもいくつか顕著な変化が見られる。第1に、1970年代までは先住民の社会と文化に関する民族誌的調査や民族誌の作成が研究の中心であったが、1980年代を境に応用的・実践的研究が多くなるとともに、研究テーマが多様化し先住民に関する法学分野や経済学分野、教育学分野、福祉保健分野の研究数が増加した。第2に、1970年代までは非先住民研究者が先住民文化を客体として調査するやり方が主流であったが、1980年代ごろから徐々に研究者と現地先住民との協働調査が増加してきた。また、21世紀に入ると先住民自身が調査・研究し、著作や自伝的民族誌を出版することも多くなった。第3に、気候変動や資源開発、グローバル化が現在の環北太平洋沿岸地域の先住民社会に及ぼす諸影響や先住民側からの対応に関する研究が増加した。さらに伝統的生態学的知識 (traditional ecological knowledge) や生業活動 (subsistence activities) の多面的な重要性が認識され、それらに関する研究が盛んに実施されている。

以上のように学問分野ごとに一定の傾向が見られるが、全体に共通する傾向として研

究の学際化や超学際化が進んでいる。一方で、各分野において研究の担い手となる若手研究者数の減少傾向が顕在化している。今後、環北太平洋沿岸地域の各先住民族の言語や文化、社会の間の歴史的関係性や歴史的变化、現在や将来を解明するためには、学際的・超学際的共同調査をいかに進め、そこから生まれた成果をいかに総合化するかが大きな課題であるといえるだろう。また、今後は若手研究者の育成とともに、国内外の研究者や先住民がネットワークを形成し、連携しながら学際的・超学際的共同研究を推進することが必要であると考え。本論文集が、環北太平洋地域の先住民文化の研究のさらなる発展に貢献できれば、執筆者一堂にとって幸いである。

岸上伸啓